

【実践報告】

地域に暮らす小・中学生に大学を知ってもらうには 徹明さくら岐阜大学体験入学の開催を振り返って

白村 直也¹⁾

岩澤 淳²⁾

¹⁾ 岐阜大学教育推進・学生支援機構

²⁾ 岐阜大学応用生物科学部

要旨

2023年11月11日（土）に岐阜市内の小学生と中学生を迎え、「徹明さくら岐阜大学体験入学」という会を開催した。2020年の新型コロナウイルスの感染拡大に伴い地域との交流が一時中断していたが、感染拡大が収束に向かう中で市民会議の要望もあり、復活する運びとなった。この会を開催するにあたっては、市民会議と話し合いを重ね、そのニーズを汲みながら学生が主導で企画を立案していった。学生ボランティアの積極的な参加もあり、会は無事に終了した。終了後に保護者、引率者向けにアンケートを実施したが、その際寄せられたコメントをもとに、次年度以降も地域の子どもたちに岐阜大学をよく知ってもらい、今後の学びに資する実りある会にしていきたいと考えている。

キーワード：ボランティア活動，小・中学生，大学生，自主企画，地域連携

1. はじめに

大学をはじめとする高等教育機関が置かれる環境の変化はめまぐるしい。大学に投げかけられる期待が日々強まる中で、今後大学がどのようにあるべきかが問われ続けている。従来大学が担ってきた「教育」や「研究」にくわえて、「社会貢献」が重視されて久しく、「教育」と「社会貢献」にまたがる活動の一つにボランティア活動がある。ボランティア活動を通じて地域の実情を知り、抱えるニーズを把握し、そしてそのニーズの充足に向けて学生という立場で何ができるかを考える。地域で活躍する人材育成を目指す上で、こうした活動は昨今非常に重視されている。

本稿が示すボランティア活動は、新型コロナウイルスの感染拡大が一応の収束を見せた今、学生が主体となって実施したものだ。学生が向き合うのは、岐阜市という地域に暮らす

小学生、中学生、そしてその保護者であった。小学生と中学生という年齢の近い者同士の異年齢間の交流促進にくわえ、その保護者のニーズをいかに汲み取り、イベントを企画し、実施するかが問われた。学生にとっては、培ってきた専門的知識・技能を活かすことのできる機会であり、そうした人々と関わることで得た経験が学生らのキャリア教育にもつながる時間となった。本稿では、その経緯を記す。

2. 徹明小との関わり—今までの活動を振り返る

地域の自治会、子ども会、学校、PTA、公民館、民生委員・児童委員などの様々な主体と連携して青少年の健全育成をはかる目的で、わが国の各地に「青少年育成県（市町村）市民会議」が組織されている。岐阜市においては「岐阜市青少年育成市民会議」が1969年に結成され、青少年育成の市民活動を総合的に推進する組織として、こんにちまで活発な活動を行っている¹。子ども・若者育成支援推進法（平成二十一年法律第七十一号）に基づく岐阜市の計画である「第3次岐阜市子ども・若者生き生きプラン」（2023～2027年度）においては、施策推進の重点のひとつとして「多様な地域資源の活用」がうたわれ、青少年育成市民会議等の団体と家庭とのつながりの中で、子ども・若者の自己実現や社会参画を目指す活動の支援が行われることとなっている²。岐阜市青少年育成市民会議のもとにはブロックおよび地域ごとの青少年育成市民会議が置かれており、このうち徹明青少年育成市民会議は旧岐阜市立徹明小学校（2017年3月閉校）の校区を活動地域としている。

旧徹明小学校（現在、校舎は岐阜市立草潤中学校として使われている）の校庭には1990年代に設けられた「夢の小川」と名付けられた「ビオトープ」（本稿では、環境教育などを目的に校庭に造成された、自然を模した庭園）があるが、閉校（徹明さくら小学校への統合）に伴って十分な手入れが行き届かなくなった。徹明青少年育成市民会議（以下、市民会議）では子ども会などの協力を得て年に数回のビオトープ清掃活動を実施しており、さらに、子どもたちや保護者が参加する活動を通じて生物が生息するビオトープの整備をはかりたいと考えていたとのことである。このような中、2019年5月にビオトープへのホタルなどの水生生物の導入に向けた水質調査の依頼が市民会議から岐阜大学の産学連携コーディネーターを通じて応用生物科学部にあり、たまたま「ビオトープ論」という2年生の授業を担当していた筆者（岩澤）が窓口役として対応することになった。

実際に夢の小川ビオトープを見学し、市民会議のメンバーの思いを伺って話し合いをする中で、「急いでホタルなどの生き物を導入するのではなく、校区の小中学生や大人たちがビオトープを含めた校庭の樹木や草花と一緒に観察したり、ホタルがやってくるような自然環境について考えたりして、校区の環境に興味を持ってもらうことが大切ではないか」という小さな方向修正が行われた。この小川の水源が水道水であり、水生生物の生息に必ずしも適さないことも考慮した修正であった。

タイミングよく、岐阜県内の大学と短期大学等で組織する連合体「ネットワーク大学コンソーシアム岐阜」が「学生による地域課題解決提案事業」を公募しており、採択されると活動資金が提供されることがわかった。そこで、筆者（岩澤）のゼミ生を中心に応用生物科学部の学生・大学院生に呼びかけ、総勢12名からなる即席の学生団体「徹明青少年育成サポーターズ」を作った。学生たちの相談の結果、団体の愛称名は「徹明さくら」と「ビオトープ」をかけて「team さくらと一ふ」と決まった。旧徹明小学校の校庭には岐阜市の中心市街地としては貴重な豊かな緑があり、子どもたちの環境教育の絶好の教材になる。さらに、徹明小学校は明治6年に創設された日本でも有数の歴史ある小学校なので、校庭の自然観察だけでなく、校区の自然や歴史、伝統行事などを一体として、クイズやゲームなどを交えて楽しく学ぶプログラムを考えることにした。このことで子どもたちに地元（ふるさと）に愛着を持ってもらい、将来の進学や就職で都会に引っ越してもまた徹明町に帰ってきてくれるようなまちづくりにつなげ、最終的には徹明地区の活性化につなげたいと、team さくらと一ふの学生たちは議論を重ねた。「地方都市の駅前商店街のシャッター街でも人口減少に悩む中山間地域の限界集落に近いところでも、その地域に愛着を持っている住民が多い場合にはいろいろな活性化イベントが行われたりして活気があると社会学の授業で聞いた」「鎌倉市はもともと活気のある観光都市だが、“地元が好き”という大勢の事業主が“人のつながり”を重視したまちづくりで移住者などをさらに増やしているらしい³⁾」といった意見交換を経て、「地元への愛着」がキーワードとなった。応募の申請書には「岐阜県では進学、就職などによって県外へ流出する若者が多く、大学進学者の8割以上が県外の大学に進学します（岐阜県商工労働部，2018）。しかし、小学生の頃から校区の自然に親しんだり、大学生や大人と楽しく勉強したりした思い出は、地元を好きになることにつながり、家族ができたならまた地元に戻りたいと考える子どもが増えることにつながるかもしれません。すぐには実現できないと思いますが、私たちはこうしたことにつながるような、楽しい自然観察プログラムを地域の方といっしょに作りたいと思います」と書かれている。この応募は幸い採択され、その後形を変えながら続く一連の活動がスタートすることになった。

この年には8月にビオトープの清掃活動の日に合わせて校庭の植物を使った草木染めの葉づくりを小学生と行い、11月には「徹明地区文化祭」に出店して地域の方にキャンドル作りを楽しんでいただいた。さらに12月には子ども会主催のクリスマスイベントでもキャンドル作りを行った。もともと、環境意識向上を目的として廃油キャンドルを予定していたが、製作時間などの都合で一般的なアロマキャンドル作りになってしまったのは活動の趣旨からは残念なことだった。しかし、子どもたち、地域の大人たち、team さくらと一ふの学生ともに、とても楽しい時間を過ごせたことは幸いであった。このキャンドル作りのノウハウは、岐阜大学の別の学生団体が東京オリンピック・パラリンピックに向けて岐阜市柳ヶ瀬地区の市民とともに企画した「キャンドルナイトリレー」に活かされたと聞いている。

このように、「ビオトープの水質検査」という具体的な依頼からはじまり、ホテルを放流したいという市民会議の当初のもくろみとはやや異なった方向へ進んだ学生たちの活動は、

ボランティア活動のノウハウもほとんどない中であって、市民会議の包容力と「徹明町愛」ともいえるパワーに導かれて進んでいった。2019年12月には、岐阜駅前の岐阜大学サテライトキャンパスで開かれた「学生による地域課題解決提案事業」の成果発表会を無事に終えることができた。市民会議のメンバーがこの発表会を見にいらしたのは、何よりも嬉しいことであった。年が明けた2020年の当初からは新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい、team さくらと一歩の学生たちもやや志半ばで卒業していき、地域との活動はいったん休止となった。

コロナ禍の大学での活動レベルも少しずつ緩和されてきた2022年10月、こんどは「徹明まちづくり協議会」(自治会など地域の関係者で構成するまちづくりの推進組織)から「子どもたちにぜひとも大学を体験させたい」との相談があった。大学らしい階段教室のような場所で教授の授業を受けたり、学食を体験させたりすることで、子どもたちに自らの将来への意欲を高めさせたいという意図とのことであった。筆者の岩澤はかねてから、こうした地域との交流を教員個人レベルではなく、正課の学生教育などを通じて何らかの形での地域と大学生との組織的な交流につなげたいと考えていた。そこで、全学共通教育の授業「現代社会とボランティア・地域活動」の主担当者である筆者の白村に相談し、受講学生が授業の一環として行うボランティア活動の選択肢の一つとして、徹明の子どもたちの大学体験のサポートをしてもらうことにした。

ボランティア活動を専門に学んでいる学生の参画によって、大学体験の計画は一気に現実味を帯びた。この行事は「徹明未来塾 岐阜大学一日体験入学」という名称で2022年11月12日(土)に行われた。この日に来学したのは徹明子ども会の「インリーダー」と呼ばれる研修を受けている子どもリーダー(5~6年生)と付き添いの子ども会役員(大人)など、総勢20名ほどであった。秋らしい晴天に恵まれ、応用生物科学部の岡本朋子准教授(昆虫生態学)の授業体験やキャンパス内のクイズラリーが行われた。テレビ番組への出演経験もある岡本先生の絶妙なトークの後には、子どもたちばかりでなく、大人からも質問が絶えなかった。クイズラリーは上記ボランティア授業の受講学生による完全な「学生企画」である。全問正解すると「来てくれてありがとう」という文章ができあがるようになっていた。引率の大学生と子どもたちはすっかり「仲良し」になった様子で、ゴール後も談笑が続いた。子どもたちも付き添いの大人も大いに満足して帰られたようで、後日に岡本先生と学生あてに子どもたちから届いた寄せ書きの色紙は、感謝の言葉や「岐阜大学に入れるように勉強を頑張ります!」といったメッセージで埋め尽くされていた。とは言え、子どもたちがお礼として書いた色紙だけではなく、保護者も含めたアンケート調査などによる定性的・定量的評価が、授業としてのボランティア活動を通じて学生によりよい学びを提供するためには不可欠と考えられた。

3. 市民会議との打ち合わせから「徹明さくら岐阜大学体験入学」開催へ

(1) 市民会議との打ち合わせ

さて、こうした経験を踏まえて今年度は市民会議から体験入学実施の打診があった。具体的などのような企画を立てるかをめぐって、市民会議の皆さん13名と、2023年7月19日(水)19時より草潤中学校(岐阜県岐阜市金宝町4-1)にて対面で打ち合わせをした。岐阜大学からの参加は本実践報告執筆者2名にくわえて教員1名、そしてボランティアとして参加する学生1名が参加した。

このメンバーが一堂に会するのは初めてということもあり、会の冒頭に簡単な自己紹介を各自行った。続いて昨年度の振り返りをした後で、今年度も開催するかどうか、開催するならばいつが良いかについて話し合った。日程については、11月11日(土)、午前の時間帯で行うこととなった。

席上で出された市民会議の皆さんからの要望として、①より多くの学生と触れ合えるようにしたい、②岐阜大学に行く際、バスに乗車することで公共交通機関の乗り方に慣れさせたい(可能なら連節バスの清流ライナー)、③学内を見学したい、④学食で食事をとらせてあげたい、といった点が寄せられた。また、徹明小学校は、2017年に木之本小学校と統合し、岐阜市立徹明さくら小学校(岐阜県岐阜市木ノ本町1-18)となったが、旧木之本小学校の学区に相当する木之本青少年育成市民会議との共催で行いたいとのことで、昨年が増えて多くの小学生たちが大学に来ることが想定された。

②については、岐阜大学の学生が通学で使用する清流ライナーは土、日曜日は運行していないため、イベント当日に乗車することはできない、また④の学生食堂も土、日曜日は営業していないことから、この2点については断念せざるを得なかった。だが、その分①と③でもって、小学生と中学生により良く岐阜大学を知ってもらい、興味を持ってもらえるようにしようということで落ち着いた。

また、これからも長くこうしたボランティア企画が続くためには、参加する学生にとっても実りあるものでなければならないということから、市民会議の方から、「学生にとって当ボランティアの意義は何か。」との発言があった。同席していた学生からは、『どんなことをしたら小学生のみんなが喜んでくれるか、楽しんでくれるか。』を昨年ボランティアに参加したメンバーで、考えて企画を創り上げることの大変さややりがいを感じることができた。また、去年の参加メンバーは私含め2人以外全員教育学部であり、教育学部は教育実習以外で子どもたちと関わる機会がない。そこで悩みとして『子どもとの接し方がわからないまま先生になることへの不安がある。』と以前語っていた。その点このボランティアは、子どもたちと関わる機会を持てることにより、教育学部に所属するメンバーにとって、この上ない良い機会となっていると考えている。」との応答があった。

市民会議との話し合いは以上のように進み、当日学生と子どもたちで何をするかは、学生からあらためてアイデアを出し、皆で検討することとした。

(2) 学生の企画

この打ち合わせを踏まえて、10月16日(月)18時より、打ち合わせ参加メンバーで学内の打ち合わせを行った。岐阜大学に来るのを楽しみにしてくれている小学生や中学生をどのように迎えるか、また学生と一緒に何をするかなど、大まかな方向性について話し合った。学内の学生団体に協力を仰いでみてはどうか、もしくは学生と一緒に手軽な調理を試みてはどうか、など様々なアイデアが出された。大元のテーマとして、昨年度は「昆虫」であり、今年は「食品」としようということもあり、まず、小・中学生が興味を持って学べるミニ講義を応用生物科学部の矢部富雄教授にお願いし、講義の後に、学生と一緒にできる食品実験をしようとなった。

当日具体的に何人の子どもたちが岐阜大学に来てくれるかは、まだ確定はしていなかったものの、相当数の子どもが来てくれることを想定し、①小・中学生を2つのグループに分けて、2つの企画に交互に参加してもらう、②当日の運営に協力してくれる学生を募ることとなった。

①については、2つの分かれたグループに、企画展「おもしろい骨のはなし しらべる・つくる・のこす」(岐阜県博物館・岐阜大学・名古屋大学博物館連携企画展、於：岐阜大学図書館)観覧と、実験体験「うがい薬で実験! ビタミンCが多い野菜をしらべてみよう」(於：応用生物科学部棟206実験室)を交互に訪問してもらうこととした。また、②については、全学共通教育「現代社会とボランティア・地域活動」(水曜日3限)で興味関心のある学生に声がけし、結果7名の学生が参加してくれることとなった。

学生ボランティアの初顔合わせは10月25日(水)14時半から行った。それぞれ簡単な自己紹介を行った後、ボランティアの内容説明を行った。また、別途当日のリハーサルを行うこととなり、会の終了後に日程調整を行った。

4. 「徹明さくら岐阜大学体験入学」当日の様態と保護者の声

(1) 「徹明さくら岐阜大学体験入学」当日の様態

当日を迎え、次のようなスケジュールで会は進んでいった。

【当日のタイムスケジュール】

時間	行動内容
午前8時40分	岐阜大学到着、応用生物科学部棟へ移動
午前9時	模擬授業 矢部富雄先生(応用生物科学部)「食べ物のヒミツ～身近なワクワク科学!」於：応用生物科学部棟101講義室

午前9時30分	学生ボランティア（7名）集合，打ち合せ
午前9時45分	模擬授業終了，トイレ休憩の後会場への移動
午前10時	2チームに分かれて，AとBを順に体験 A 構内の散歩（企画展「おもしろい骨のはなし しらべる・つくる・のこす」観覧），応用生物科学部学芸員課程の学生2名に展示物の解説を依頼 B 実験体験（「うがい薬で実験！ ビタミンCが多い野菜をしらべてみよう」）於：応用生物科学部棟206実験室
午前10時45分	再集合（101講義室），修了書の授与。引率者へのアンケート調査
午前11時10分	バス停へ移動
午前11時20分	バスに乗車，学生ボランティア解散

【当日の様相】



図1. 応用生物科学部棟101講義室にて開会のあいさつ



図2. 矢部富雄先生による模擬授業「食べ物のヒミツ～身近なワクワク科学！」



図3. 図書館の企画展見学 ①



図4. 図書館の企画展見学 ②



図 5. 学内散策 ①



図 6. 学内散策 ②



図 7. 実験体験の様子 ①



図 8. 実験体験の様子 ②



図 9. 終了後の写真撮影

当日参加した学生ボランティアは計 7 名おり、「A 構内の散歩（企画展観覧）」に学生 2 名が付き添い、学内を案内し、「B 実験体験」には、子どもたち 4 名ごとに座った各テーブル計 5 テーブルに 1 名が付き、実験がうまくできるように補助をした。

（2）引率・保護者向けアンケートの結果

引率・保護者として来学されたのは、全部で 7 名であり、会の最後にアンケートへのご協力をお願いした（質問項目は 7 点設定）。アンケートはインターネットのアンケート作成専門サイトで作成し、QR コード化して、当日それを読み取ってもらい、インターネット上で回答をしてもらうこととした。回答の際は匿名とし、自由で率直な回答を期待した。

「質問 1：今回の岐阜大学体験入学への参加は初めてですか？」については、「初めて」が3名、「昨年も参加した」が4名いた（「自分は初めてだが、家族（お子様を含む）は昨年度も参加した」は0名）。当日、昨年度も参加して楽しかったので今年度も参加したという生徒がいたが、こうした生徒がいたことは非常に喜ばしく、年を追うごとに増えて行くように今後も改良を重ねていきたいと思う。

「質問 2：今回の岐阜大学体験入学以外で、岐阜大学のイベント（岐阜大学が大学外で行うイベントも含む）に参加されたことはございますか？」については、「ある」が2名、「自分はないが家族（お子様を含む）はある」が2名、そして「自分も家族もないと思う」は3名であった。ちなみに、「質問 3」では「質問 2に「ある」と回答頂いた方へ」イベントに参加された回数を教えてください。」とし、「ある」2名と「自分はないが家族（お子様を含む）はある」2名に対して、参加した回数について尋ねたが、1回が1名、2回が2名、そして4回以上が1名だった。今回のイベント企画に限らず、また今まで複数回参加していただいている方に限らず、大学が開催する他のイベントにもより積極的に参加してもらえそうな仕組み作りが必要だと感じた。

そして最も気になるのが、参加してくれた子どもたちが楽しんでくれたかどうか、である。この点について、保護者、引率者からみて「質問 4：子どもたちは楽しんでいるように見えましたか？」と尋ねた。結果としては、「非常に楽しんでいた」が2名、「楽しんでいた」が4名、「いつも通りだった」が1名、そして「あまり楽しんでいなかった」と「楽しんでいなかった」は0名という結果だった。保護者、引率者の目から見て、こうした回答が得られたのは非常に喜ばしいことだった。

今回は企画のコンテンツとして、矢部富雄先生の模擬授業、図書館の展示会、そして実験体験の3種類を用意した。そこで、「質問 5：どの企画が子どもたちには合っていましたか？」と複数回答可で尋ねたところ、実験体験が最も多く7名だった（「矢部先生のお話」5名、「図書館の展示会」6名）。矢部先生のお話の際には、小学生はもとより引率者からも非常に鋭い質問が出されたこともあり、大人も前のめりになって学べるお話だった。

質問 6 と 7 では、次回開催を念頭に改善点などを訪ねた。「質問 6：今回の企画で改善した方がよい点はございましたか？（複数選択可）」では、「開催日時」、「企画内容」、「運営対応」、「進行・時間配分」が各1名おり、「特にない」という回答は5名だった。保護者、引率者の目から見て、今回の企画はおおむね成功だったといえそうだ。そして「質問 7：何かお気づきの点やご要望、またはこういう企画を等、ご希望がございましたらお知らせください。」では、以下のようなコメントが寄せられた。

地域に暮らす小・中学生に大学を知ってもらうには

回答①	大学内に入ること 授業を受けること 現役大学生と触れ合えること どれも子どもたちにとっていい体験になりました。ありがとうございました。
回答②	大変素晴らしい企画を提供していただき有り難うございました。子ども達のわくわく感がとてもよく伝わってきました。今後も宜しくお願いします。
回答③	今日はありがとうございました。教授の授業は大変わかりやすく、普段の授業では教わらないような内容で、こども達にとって、大変貴重な体験になったと思います。現役大学生ボランティアさんの丁寧な案内と説明で大変わかりやすく、よかったです。お世話になりました。ありがとうございました。
回答④	本日は有り難うございました。充実した内容で思い出となる良い体験ができたと思います。より良くなるために一点思いましたのは、大学生の皆さんがもっと大きな声で楽しそうにリードして頂いたほうが、子どもたちもより元気に盛り上がったんじゃないかなということです。おとなしい子が多いので、テンション上げるのはなかなか難しいかと思いますが、大学生の皆さんご自身が楽しんで頂くことが子どもたちにも伝わるのではと感じます。また来年、お会いできると幸いです、企画から対応まで本当にありがとうございました。
回答⑤	この度は子供達のために貴重な経験をありがとうございました。岐阜大学に入れることとても子供達は喜んでいました。子供達が学べるように色々と工夫していただいてとても楽しかったです。ぜひまたこのような機会があると嬉しいです。
回答⑥	少し遠慮がちでおとなしい子が多いと思いました。学生さん達と子供たちが少し体を動かせるイベントがあると打ち解けやすいのかな～
回答⑦	もっと気軽に小学生、中学生に話しかけてあげると、打ち解けていけるのではないかと思います。大学生と参加した小学生、中学生とが、まだまだよそよそしい感じがしていました。

また、今回学生ボランティアとして参加した学生は、一日を振り返って次のように述べている。

「学生企画を担当させていただいた上で心がけたのは、小・中学生が大学での学習に対するイメージ形成を図り、本イベントが学習意欲向上のきっかけになるように、また活動班を1グループ4～5人構成にし、異学年交流を活発に行えるようにした点です。よって模擬講義と関連する実験を企画し、図書館で行われていた動物の骨に関する企画展の見学時に実験室から図書館までの道のりを大学の施設（食堂や学部棟など）を紹介しながら歩く、2つの企画を考案いたしました。



図 10. 帰りのバス停で

実際に企画を遂行してみると、普段は関わることのない年代との交流は非常に新鮮で、むしろ大学生側が学ばせていただいた点多々あります。異学年であるため、お互いが持っている常識やできることが異なる点を考慮し、思いやりを持って接することが最も重要であると感じました。

このようなボランティアの機会をいただけたことに感謝するとともに、また機会があればぜひサポートしていきたいと思っております。」

5. おわりに

小学生や中学生に大学とはどのようなところなのか、を知ってもらうにはどうしたらよいか。極力楽しく、学生と触れ合う中で大学をより身近に感じてもらえたらということから、本企画はスタートした。

企画の検討を進める中で、社会システム経営学環 2 年（2023 年度）の丹羽彩菜さんは、昨年度に引き続き今年度も、学生代表として本企画を強いリーダーシップを持って進めてくれた。ここに謝意を記したい。彼女以外にも、今年度は全学部からの学生ボランティアの参加があり、会の成功に大きく貢献してくれた。

学生ボランティアは参加することで多くの子どもと触れ合ったが、この経験を通じて何かを感じてくれたことだろう。今後の学生の学びに活かされることを願う。さらに、今回の学生ボランティアの一人は、偶然ながら旧徹明小学校の最後の卒業生だった。2022 年の徹明の子どもたちの「岐阜大学へ入りたい！」という希望は時をさかのぼって実現していたことになる。地方大学ならではのこうしたループが今後も続くことを期待したい。

あらためて当日を振り返ると、いろいろ反省すべき点もあったように思う。保護者、引率者の皆さんからいただいたコメントをもとに、次回以降さらにより良い会となるよう取り組み、正課のボランティア活動がよりよい学生教育の場となるよう、取り組んでいきたい。

【注】

地域に暮らす小・中学生に大学を知ってもらうには

- 1) 岐阜市青少年育成市民会議 編 (2019) 『岐阜市政 130 周年記念 岐阜市青少年育成市民会議 50 周年記念 50 年の歩み』 110 頁。
- 2) 岐阜市教育委員会 (2023) 『第 3 次岐阜市子ども・若者生き生きプラン』
[https://www.city.gifu.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/004/036/ikiikiplan_3rd.pdf] (2023 年 11 月 20 日閲覧)
- 3) 柳澤大輔 (2018) 『鎌倉資本主義』 プレジデント社 184 頁。